

# Baby

プレジデント

0歳からの  
教育マガジン

プレジデント ベイビー

天才が育つか、凡才になるか——  
「ママの困った!」が  
分かれ目、30場面

赤ちゃんと話せる!  
アメリカ発  
「ベビーサイン」に感激

可能性は無限大! **なぜ** 1歳で椅子に座っていただけるの?

## 有名幼児教室の しつけ方 **なぜ** 0歳で返事ができるの?


**なぜ** 3歳で靴ひもが結べるの?

幼稚園入園まで待てない

### おうちで英才トレーニング大図鑑

リズム感、英会話、運動神経、数字・図形感覚、色彩センス、指先感覚





早期教育に  
迷いなし

優れた英語力と数学力を武器に、IT産業をはじめ世界のビジネスで活躍するインド人。その背景にあるのは、幼児期から始まる徹底した教育体制だ。なぜそんなに教育熱心なのか、具体的にどんな教育をしているのか——現地のインド人ママや教育関係者の証言。

村井裕美＝文 村上悦子＝撮影 (P.104～106)  
Getty Images＝写真

# 3歳から母国語禁止 世界最強インド人の つくり方



## 小学校入学前に 英語と算数の基礎を 必ずマスター

卓越した数学力と英語力を武器に、グローバルビジネスの中で存在感を増し続けるインド。今や世界各国からソフトウェア開発を引き受けるIT（情報技術）大国であり、アメリカや日本をはじめ、世界各国への優秀な頭脳の供給源ともなっている。

そんな頭脳立国を支えているのは、日本とはかなり異なる早期教育に対する意識かもしれない。

一三歳と八歳の二人の子の母で、ムンバイで英語講師として活躍するカコリ・マジムダールさんは「教育は二歳くらいから始めるべきだと思う」と断言する。マジムダールさんの子どもたちも「一三歳からアルファベツトを学び始め、三、四歳のときには簡単な足し算や引き算ができるようになっていたという。

マジムダール家が特別なわけではない。インドの中流階級に属する周囲の家庭も、ほとんどが同じような意識を持っているらしい。

が、子どもが一、二歳になるころか、場合によってはもっと早い時期から、プリスクール（幼稚園）に通わせます。四歳になってこのスクールにも通っていない子どもは、大都市ではまずいないでしょう」

一歳半から、プレースクールやプリナーサリーなどと呼ばれる幼児教室に通い始める子どももいる。文字通り遊びながら学べるし、ほかの子どもたちと触れあう機会にもなるというのが、こうした施設に子どもを通わせる親たちの意見だ。

インド出身で在日二〇年のラニ・サンクさんは、東京・吉祥寺にある「リトルエンジェルズ インターナショナルスクール」の学園長。同校では二歳児から小学生までの子どもたち（日本人がその七割程度を占める）を対象に、インド式手法をベースにした教育を行っている。彼女が教育の世界に足を踏み入れたきっかけも、日本とインドの「幼児教育」の違いに戸惑った経験だった。

京都大学に留学したご主人とともに来日した当時のことを、ラニさんは振り返る。「保育園で何をしたらの子どもに聞くと、毎日『遊んだ』『食べた』

日本をはるかに超える強烈な学歴社会のインドで、中流階級の親たちは早期教育に熱心。3、4歳からの教育はあたりまえ、中にはゼロ歳児のときから集団教育を受けさせるケースもあるとか。（写真右から時計回りに）幼稚園入園の前に通うプレースクールから出てきた親子、パソコン教材を使う子ども、デリーの私立幼稚園で入園願書をもらうために並ぶ親たち。





「寝た」の三つだけ。ちよつとびっくりしました。何も勉強していないことが少し心配になりました(笑)」

ラニさんは、わが子の年齢に合わせてレベルのインド式家庭学習を施すようになった。そのとき作ったカリキュラムが、今のリトルエンジェルスの基礎になっているという。

インドでも、早期教育にまったく異論がないわけではない。「二歳でプリスクールに行かせるのは早すぎると思う親もいます」と、ムンバイのマジウムダールさんは言う。難しすぎる小学校入試問題や子どもが受ける過度のプレッシャーを気にする親も多いが、「それでも、他に選択肢はありません。早くから通わせないと、いい学校の入学試験に向けた準備ができないから」。

インドは日本をはるかに超える学歴社会。受験戦争の厳しさは半端ではない。たいていの名門校は小学校から高校、あるいは大学までのエスカレーター式だから、小学校受験の成否は大きな意味をもつ。そうした状況のなかで、プリスクールは受験準備の場でもある。

「プリスクールを卒業するまでに、子どもたちは英語で出された指示に従っ

たり、短い英文を話したり、英語の基本的な語彙を習得していることが求められます。それに、数に関する基本的な知識も持っていないくては」(マジウムダールさん)

### 「二歳のころからママが英語でわが子に話しかけ

リトルエンジェルスのラニさんも、早い時期から学習を始めるのは子どもにとっていいことだと確信している。「二歳から六歳ぐらいまでの子どもの脳はフレキシブルで、何でも吸収できます。したがって、ストレスなしに学ぶことができるのです」

では、インドの幼い子どもたちはどのように学びの道を歩みだすのか。

「たいていの親は、子どもが一、二歳のころから英語で話しかけ始めます」とマジウムダールさん。「動物や色、乗り物などの名前を英語で教えたり、童謡を歌ったり」。地元の言語よりも英語の単語を先に覚えてしまうことも珍しくない。「小さな子が色や体の部位を指すようなとき、たいていは英語のほうを使います」

英語ライティング教育などの英語関

「他に選択肢はありません。

早くから通わせないと、

いい小学校の入学試験に向けた

準備ができないから」





連サービスを提供するインド系企業、カクタス・コミュニケーションズのCEO（最高経営責任者）、アビシエック・ゴエルさんは、「インドの大都市のアッパミドルクラス以上の家庭では、仕事だけでなく友人や家族とも英語で会話をしている人が多いんです」と言う。こうした家庭では、子どもたちはほぼネイティブのような形で自然に英語を身につけていく。

両親は英語ができるものの、家庭内の会話は主に地元の言語という層（主に中流階級）はどうか。こうした家庭でもやはり、英語は将来のために必要だという意識は高い。そこで子どもたちに英語の童謡を聞かせたり、絵本を読み聞かせたり、英語で話しかけたりといった努力をしているそう。

### 英語は サバイバルの 手段という認識

以前はディズニーなどのテレビアニメも吹き替えなしで放映されていて、英語に触れるいい機会となっていた。もつとも近年の経済発展のおかげか、最近ではヒンディー語など地元の言葉に吹き替えられることが多くなっているそうだが……。

ちなみにゴエルさんの子ども時代、家庭で主に使われていたのはやはり英語だった。「母は英語で読み聞かせをたくさんしてくれました」と彼は言う。英語の本を初めて自力で読み通

「二歳から六歳ぐらいまでの  
子どもの脳は、  
フレッシュで何でも吸収できます。  
ストレスなしに学べるのです」



したのは七歳半の時。「イギリスの児童文学作家、イーニッド・ブライトンの作品で、母は半分くらいまで読んでくれたのですが、その日も次の日も忙しくて続きを読んでもくれなかったんです」。話の先が気になって仕方なかったゴエルさんは、がんばって自力で読むことにした。わからない単語も少なくはなかったが、何とか意味は取れたという。

英語教育を早く始める背景には、中流以上の家庭ではわが子を、全教科の授業を英語で行う学校（English Medium School）に通わせる場合が多いという事情もある。小学一年生（日本よりも就学が一年早く、入学した時点ではまだ五歳）から英語で授業を受けるわけだから、準備は早いに越したことはない。

「外国語を学ぶのは母語を操る能力を固めてからにすべき」という意見はインドにも存在する。だが「基本的には親も子ども学校の先生も、将来のために英語は必要だというコンセンサスができています」（ゴエルさん）。

インドは公用語だけで二言語もある多言語国家だ。同じインド人でも、出身地が違えば全く言葉が通じない。異なる州で生まれ育った男女が出会って夫婦になれば、二人をつなぐ言語は唯一、英語ということになる。リトルエンジェルスのラニさんも、ご主人との会話は英語とか。

「英語が話せる女性は、結婚できる



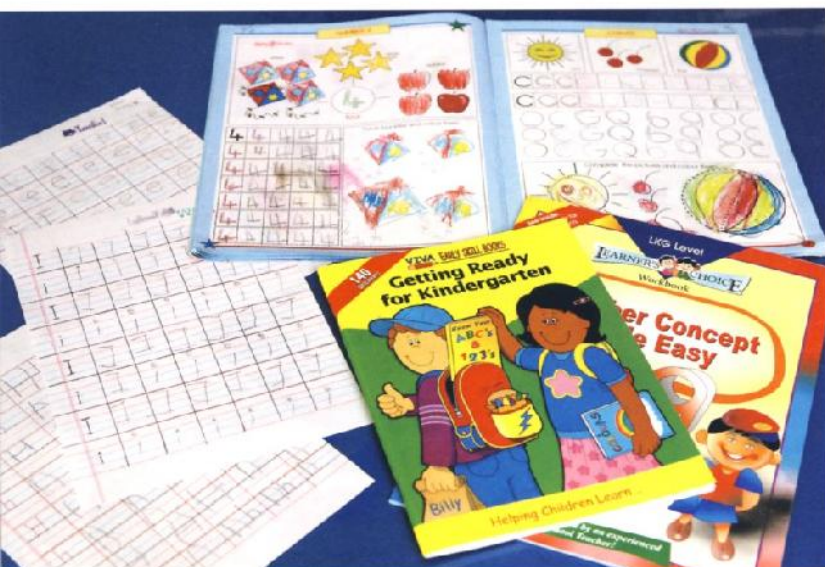
確率が三割増えるという統計があるんです」と、現地の事情に詳しいインド・ビジネス・センターの島田卓社長は語る。「生まれた州の言葉だけだと、他州出身の人とコミュニケーションがでず、仕事も制約されます。英語ができればコールセンターに勤められるし、ITの会社にも入れる。(そういう職場には) いろんな州から人が集まってきているから、出会いも増えます」。母語だけでは社会生活には困らない日本と違い、インドでは英語がサバイバルの手段なのだ。

さて、インド式幼児教育の現場を知るべく、リトルエンジェルス教室を訪ねてみた。同校では二歳児クラスから、英語でのコミュニケーションを教えている。「学校の中には英語だけ、二歳児クラスが終わるころには九九%、私たちが英語で言うことがわかるようになります」(ラニさん)

## 三歳児クラスから 教室内では 英語オンリー

子どもが「これ何?」と日本語で聞いてきたら、先生は「What's this? It's a pencil!」といったふうに返す。これを二、四カ月繰り返すうち、子どもたちは「これ何?」の代わりに「What's it?」(さすがに最初から「What's this?」は言えないらしい)と尋ねるようになる。

二歳のうちは、子ども同士の会話は日本語でもOK。「このころはまだ、



リトルエンジェルス インターナショナルスクールで使われているインド式教材のいろいろ。楽しみながら学べる工夫がいっぱい。 (写真右から) アルファベットの書き方を覚えるための木のボード、子どもたちに大人気のインド式すごろく「ヘビとはしご」、3歳児向けのワークブック。

日本語ダメと言うと何もうできなくなるから。でも先生は英語です」。危ないことや悪いことをしたときの注意も、この段階ではまた日本語併用で行う。

三歳児クラスになると、先生は子どもたちに「OK, no Japanese. Speak in English, please. (日本語はやめて、英語でね)」と声をかけるようになる。すると、一年以上英語漬けの生活をしてきたかいあって、子どもたちは何とか英単語を使って言いたいことを表現しようとする。「最初に覚えるのは、『トイレに行ってもいいですか?』といった簡単な表現。三歳児クラスが終わるころには、短いスピーチもできるようになります」。そして四歳児クラスになると、子どもたちはすっかり英語だけの学校生活に適應する。

基本的な勉強の「進度」や内容は、インドの基準とはほぼ同じ。五歳児クラスになればインドの小学一年生の教科書(もちろん、英文で書かれている)で、算数などを学び始める。

リトルエンジェルスではインド流に加え、他の優れた幼児教育メソッドを柔軟に取り入れている。たとえば、アルファベットの文字を覚えるために使う、文字の部分がざらざらした手触りカード(sandpaper letters)は、イタリア発祥のモンテッソーリ教育で使われる教材(同教育はインドでも人気が高い)。「聞いて覚える子もいれば、見て学ぶ子もいます。五感すべてを使わなければ」とラニさん。二歳児クラスが終わ



リトルエンジェルの4  
歳児クラスの授業風景。  
日本人の子どもも含め、  
学校内での会話は基本的  
にすべて英語で行われる。



るまでにはアルファベットの太文字を、  
四歳で小文字を読めるようになるとい  
う。

書くことは三歳から。綴りと発音  
の関係を教える「フォニックス」も、  
三歳児クラスから少しずつ導入してい  
る。リトルエンジェルの教室の壁に  
は、同じ文字列で終わる名詞とその  
絵がいくつも張られている。

インドご自慢の算数の教育も、も  
ちろん行われる。二歳児クラスが終わ  
るまでには、英語で20まで数えられ、  
10まで数字が読めるようになる。三歳  
児クラスでは小さなぬいぐるみなどを  
使い、足し算の基礎を教える。

### 算数センスを 楽しく鍛える インドの伝統遊び

いわゆるインド式計算は、「算数の  
基礎がしっかりできてから」というこ  
とで六年生になってから。そのかわり、  
幼児クラスでは、遊びを通じて自然に  
算数のセンスを学ぶ働きかけがみにつ  
り行われる。おはじきをまとめて手に  
取り「奇数が偶数か」を当てる遊びを  
やったり、数字の振られたマス目の上

をサイコロの目に従って進んでいく  
「ヘンリはじり」(Snakes and Ladders)とい  
うインド式すごろくを楽しんだり。  
ラニさんが子どものころに楽しんだ遊  
びもあるという。

実はインドの学校教育は詰め込み  
型の傾向が強いのだが、ラニさんは「と  
くに小さな子は、楽しみながら学ぶこ  
とが大事。そこは少し、日本の考え  
方を取り入れています」と言う。楽し  
く学べればそれだけたくさん身につく、  
と考えているからだ。リトルエンジェ  
ルスでは、小さい子どもたちにも小学  
生にも「やりなさい」と強制したりは  
しない。「やってみる？」と誘ったり、  
できたときは派手にほめたり、ご褒美  
をやったり……。

一方で、早期から英語や算数のセ  
ンスを鍛えることそのものについては、  
迷いは一切ない。「そんな小さなころ  
から勉強させるなんて、と言う人が日  
本にはたくさんいるようですが、イン  
ドにはあまりいません」とラニさんは  
言う。「私たちインド人は、その成果  
をはっきりと見ていますから」  
迷える日本の親に、その言葉はど  
う響くのだろう。

B

「そんな小さなころから勉強なんて、と  
言う人が日本にはたくさんいるようですが、  
私たちインド人は  
その成果をはっきりと見ています」